指導展開

第1次

第1時

本時の目標

これまでの学習経験を基に全文を通読し、鍵になりそうな言葉、疑問を感じた言葉、他の場面とのつながりがある言葉などに見当をつけて、短い時間で作品を読み解くために、中心となる問いを考えることができる。

主な学習活動

1 普段読んでいる作品と翻訳作品の違いを意識する。

2 作品の全体像をつかむ。

3 全文を通読し、鍵になりそうな言葉、疑問を感じた言葉、他の場面とのつながりがある言葉などに見当をつける。

4 作品を読み解くために、中心となる問いを考える。

主な発問・留意点

外国語で書かれた作品を日本語にしたものを翻訳作品といいます。これまで、翻訳作品を読んだことや、学習したことはありますか。

○教師の範読を聞いたり、交代で音読をしたりする。

私たちの生活との違いを感じるところや、気になった言葉などに印を付けながら読んでみましょう。

○違い（違和感）に意識を向けることで、本作の設定や、大事な言葉に目を向ける。

どんな言葉に印を付けましたか。

○児童の反応を基に、場面設定や人物設定を押さえる。

これまでの学習を基に、作品を読み解くポイントを、問いの形にしてみましょう。

○短い時間で学習するため、出された問いを整理して、問いを絞っていくことを伝える。

○一覧にする必要があるので、ＩＣＴ端末のアンケート機能等を使って入力させると、整理しやすい。

児童の反応・板書例

Ⓒ「ハリー・ポッター」シリーズ。学校に行くのは私たちと同じだけど、魔法の要素がある。出てくる食べ物は外国らしさがあるね。

Ⓒ「リリアーネ」シリーズの作者も外国の人だ。

Ⓒ「あまりに高い所」「命の気配といえば、空を飛ぶタカや、木々の間にかくれている小さな動物くらい」というところは、自分の生活との違いを感じる。

Ⓒ「ニワトリの引っかいたあとみたいな文字」という言葉は、最初と最後に出てくるので気になった。

Ⓒ「背中の後ろでにぎりこぶしを固めた」も気になる。

Ⓒ「ニワトリの引っかいたあとみたいな文字」とはどういう意味か。

Ⓒカルはどんな暮らしをしているのか。

Ⓒカルは、どうして本を読もうと思ったのか。

Ⓒカルは、本を読むことをどのように思っているのか。

Ⓒブック・ウーマンは、どうして何ももらわないのか。

Ⓒ題名が、なぜ「ぼくのブック・ウーマン」なのか。

第2次　第2時

本時の目標　短い時間で作品を読み解くための問いを絞り、視点人物であるカルの人物像や変化を読み解くことができる。

主な学習活動

1 短い時間で作品を読み解くために問いを絞り、学習の見通しをもつ。

2 カルの人物像や変化について話し合う。

主な発問・留意点

○前時で書いた問いの一覧を用意しておく。

みんなの問いを分類すると、多かったのは、主人公カルに関わるものでした。そこで、最初の問いは「カルの人物像や変化はどのようなものか」とします。

カルがどんな人物として描かれているか、グループごとに、大事な言葉を集めてみましょう。

○大事な言葉を書く短冊を用意し、それを関連づけることで各自の読みが絡むようにする。

どんな言葉を集めたかを出し合って、カルの人物像や変化について考えていきましょう。

○児童の作った問いを使って発問し、教科書の言葉や児童の読みを板書で構造化する。

○誰かの挙げたキーワードに関連づけて、他の児童が選んだ大事な言葉が話されるようにし、それぞれの読みが板書に位置づいて整理されるようにする。

○この作品は、視点人物であるカルの見方・考え方が表れた書かれ方になっていることを押さえる。

児童の反応・板書例

近くに学校がない　ラーク：妹、本ばかり読んでいる
山の高い所　⇔　←勉強を教えようとする
大家族・びんぼう　カル：長男、家の仕事の手伝い
「ニワトリの引っかいたあとみたいな文字」

その女の人…一日がかりで山の上まで上がってきた

ラーク：まるで金のかたまりを見るように
カル：まるっきり宝物なんかじゃない、むだ
にぎりこぶし　↓女の人：きっぱりと首を横にふる
道を忘れていたって、ちっともかまわない
↓女の人：どんな日でもやって来る
←
冬　真っ白な世界・家から一歩も出られない↓女の人が来た

いろんな考えが、ぼくの頭の中をぐるぐる回った
乗っている人だって勇気がある
ここにやって来る訳を、どうしても知りたくなった
「何て書いてあるか、教えて。」
←
こもりっきりの生活　カル：気にならない

春　カル：照れて、首をすくめた
「何かプレゼントできればいいんだけど――。」
だきかかえていた本を開いた
↓女の人：「それで十分。」顔いっぱいにえみ
思わず、ぼくもほほえみ返した

第2次 第3時

本時の目標

ブック・ウーマンに対するカルの見方が変わるとともに、本に対する見方が変わっていくことを読み取り、書かれていない部分を想像することができる。

主な学習活動	**1** ブック・ウーマンに対するカルの見方がどう変わったのかを考える。 **2** 本を読めるようになったカルの喜び、本によってカルの生活がどのように変わったのかを想像する。 **3** 題名について、考えを出し合う。
主な発問・留意点	**カルの様子が変化したのはどこからですか。** ○どうして変化したのか（理由）とともに、どのように変化したのか（行間）を考えることが、次の問いに関わる。 **カルは、どうしてブック・ウーマンにプレゼントをしたいと思ったのでしょう。** ○「本が読めるようになった」と「本が好きになった」といった言葉の違いから、そこに内包される意味を言葉にできるようにする。 ○本を読むことのおもしろさ（楽しさ）とは何かは、本文中には書かれていない。物語の設定から想像したり、自分の経験と重ねて言葉にしたりする。 **残り一時間で、みんなの問いから「ブック・ウーマン」について考えたいと思います。「ぼくのブック・ウーマン」という題名について、どう思いますか。** ○クラスの実態に合わせて、子どもが考えた別の問いを取り上げてもよい。
児童の反応・板書例	C 初めて、女の人のことを「ブック・ウーマン」って言っているところ。 C 女の人が家にやって来る訳を知りたくなったところ。 C 何かプレゼントをしたいと気持ちを伝えたところ。 C 女の人のおかげで、本が読めるようになったから。 C 女の人のおかげで、カルも本が好きになったから。 C 本を読むことのおもしろさを教えてくれたから。 C カルは、本を通して、今まで知らなかった世界のことなどをどんどん知っていったんだと思う。 C 本を読むことのおもしろさって、自分が体験できないことを経験した気分になれること。 C 「ブック・ウーマン」は題名に入っていいと思うけど、「ぼくの」じゃなくてもいいかな。 C 「ぼくの」には、どんな意味があるのかな。 C 「何も欲しがらないブック・ウーマン」とかかな。 C どうして女の人は、ただで本を渡していったのかな。

第3次　第4時

本時の目標　この作品の題名や副題を考えることで、自分にとってのこの作品の意味を明らかにし、学習の感想を書くことで、自分と本の関係を言語化することができる。

主な学習活動	主な発問・留意点	児童の反応・板書例
1 題名「ぼくのブック・ウーマン」について考える。	**前の時間は題名について考えていましたね。原題は「That Book Woman」でした。「ぼくの」と「あの」だと、どちらのほうがしっくりきますか。** ○言葉に内包される意味に着目させる。	C「あの」だと、昔のことを思い出しているように感じる。 C「ぼくの」のほうが特別な人っていう感じがする。 C自分にとって特別な人ということかな。 C本の世界と出会わせてくれたから特別なのかも。
2 作品に付ける副題を考える。	**題名は「ぼくのブック・ウーマン」だとして、あなたがこの作品に副題を付けるとしたら、どうしますか。** ○副題には、この作品をどんな話として受け取ったのか、読者にとっての主題が表れる。友達の副題から、自分の読み方を自覚する。	C「何ももらわなかった女の人」 C「山の上まで本を届けてくれた人」 C「本の世界と出会わせてくれた人」 C「ぼくの世界を広げてくれた人」
3 学習の感想を書き、自分と本の関係を言語化する。	**どうしてその副題を付けたのかを含めて、今回の学習の感想を書きましょう。** ○本を読むことでどのように世界が広がったのか、自分と重ねて書く。 ○問いを絞ることが単元のポイントであったため、「深く考えることができる問いだったか」という観点を加えて振り返ることができるとよい。	●副題で付けた言葉の意味を説明することで、この作品をどう読んだのか、自分にとっての本の世界をどう感じていたかを言語化する。 ●「本」に漫画を含めてよいかを問われることが想定されるが、「世界を広げてくれる」という点が共通していれば、それも題材になりうる。

新しいものに出会う

世界恐慌のあおりで経済的に停滞する一九三〇年代のアメリカにおいて、学校や図書館といった公共施設がなく、文字文化に触れることができないへき地の子どもたちのために、移動図書館の役割を務めた人たちがいた。

山間部のへき地、厳しい自然の中に暮らす主人公のカルは、文字は読めないが、現在の生活に大きな不自由を感じずに過ごしている。その考え方が、本との出会いを通して変化していく。きっかけとなったのは、危険な山道を顧みずに何度でもやって来るブック・ウーマンの姿であった。

本というメディアがもつ力を題材とした本作を通して、読者である子どもたちはまさに、土地や時代、文化の違いを超えて、異なる文化や価値観と出会うことになる。

外国の児童文学を読むことの意味は、それが他国の暮らしを知る窓になることとともに、自国の暮らしを見直す鏡となることだといえる。たくさんの本に囲まれて過ごしている私たちにとって、本を通して世界を知ることの意味を捉え直す機会とすることができるとともに、別の翻訳作品への読み広げの機会とも考えられる。

学んできた読み方をいかす

六年生の文学作品は、「帰り道」「やまなし」「海の命」と、名作ぞろいである。反面、それぞれに個性が強い作品であり、一つの作品で学んだ読みの視点を別の作品にいかすことが難しい。その点から本作を見てみると、「帰り道」と同じ一人称視点、「やまなし」で考えた対比や描写の意味、そして、本作で経験した行間を埋める読みは、「海の命」を読み解くことにつながっていく。

その意味で本作は、それぞれの作品で経験してきた読み方を意識的に活用することで、自分の生活とは異なる世界が描かれていることの意味や価値を言葉にして分かっていくことができる。つまり、本単元での学習経験は、それぞれの文学作品をつなぎ、教室での読みを自分の読書生活にもつないでいくハブのような役割を果たすことになる。

四時間をどう扱うか

令和六年度の教科書改訂で狂言に替わって翻訳作品を位置づけた本単元だが、他の教材や指導事項との関連から、配当時数は四時間となっている。本単元の目標として、読解と読解をつなぐ、読解と読書をつなぐ、読書と自身の生活をつなぐなど、さまざまな単元設定が考えられる。

本稿では、作品を読解することを通して本から世界が広がる喜びを考える展開としたが、四時間という設定で多くのことをねらおうとすると、「新しい作品を読む」だけの経験として過ぎていってしまう。読み広げを意識するなら、翻訳作品を多く並べた図書室で授業することで、別の翻訳物を手に取る機会になるだろう。読書生活を意識するなら、次のパンフレットを書く活動との複合単元として、時数を増やすことも考えられる。

子どもたちの読解の経験や読書生活を鑑みた、教師の単元デザインが問われる教材であるともいえる。